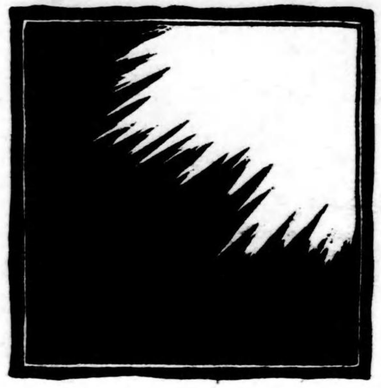
よなほり



増野皷雪著

特

始

特100
316

よなほり

皺雪集

—第一輯—

大正
11. 9. 6
内交

はしがき

○教祖四十年祭は大正十年一月廿七日本部が直轄教會長を集めて教祖四十年祭を大正十五年一月に執行する旨發表せられた同日天理教校の同窓會第一回總會に於いて私しの述べた講演であります

○授訓の考祭は大正十一年三月廿七日より六日間全國の教會長を本部に招集して講習會を開催された時に私しの講述したものであります

○地場の意義は大正十年八月廿七日から開催された北大教會の講習會の第一日に講じたものであります

○逝ける者來る者は大正十年の八月河原町大教會に於いて講習會の最終日に行はれた夕方からの講演會に出席して講演したものであります

○「よなほり」と題したのは御教祖の四十年祭はよなほりの旬なることを切に感じて其の悟の下に活動する事を記念したいと思つたからであります

よなおり

目次

教祖四十年祭　一
授訓の考察　三七
地場の意義　六七
逝ける者來る者　九三

教祖四十年地

よなおり

教祖四十年祭

増野道興

一

三十年祭前後が、本教の大きな節の一つであつた事は、何人も認てゐる所でありますが、其大きい節に際會して、何等の致命的な重傷も負はずに、無事に通り得たのは、全く神様の御守護に依る所であります。然し何等の重傷を負はなかつたとは云

へ、節である以上種々の不幸が續出して、本教全體の上に何處となく、いづんだ空氣の漲つてゐた事は、蔽はれぬ事實であります、其の當時を今から考ますると、凡の人が殆ど安定を失つて、進むべき道さへ見出せなかつたと云べき有様であります。

然し時が凡ての傷を癒す如く、日一日と其不安の雲も薄らぎ、丁度雨風が治まつた時の様な、氣持の好い時が廻つて來ましたので、人々は始めて安心の胸を撫でると共に、新しき勇氣を感じて來たのであります。

其の新しき勇氣をもつて、始めかけたのが青年會でありました、其の證據には青年會が創立せられた爲めに、本教内にどれだけの活氣が出たかも知れません。殆んど行き詰まつて居た教

會が、是れが爲めに復活して、非常な勢を得たのであります。それから繼いて婦人會の天理女學校創立となり、更らに青年會館の建築となりまして、人々の精神は非常に緊張して來たのであります。思ふに此の二つの事業は、立教八十年代を飾る双璧であらうと思ひます。

然し現在の本教の勢力と信仰とを以つて、是の二つの事業を成功したことのみで滿足せらるゝでありませうか。世を立て替へて世界を六字に踏みならすべき理想と、教祖五十年の御苦勞に對する報恩の念よりすれば、是等の事は第二義若しくば第三義のものであります。もつと根本的なもつと緊急なるものがなくてはならぬ。それは何であらう。信徒や教徒の胸にはそれが

日夜往來して居たのでありますが。否現に今それを問題として、人々は焦慮しつゝあるのであります。

此の時本部に於いては四十年祭の執行を提唱せられたのであります。直轄教會長は直ちに是れに唱和せられた。信徒教徒は此の四十年祭の聲を聞て、卒然として胸中に抱ける不言の問題を解決するを得たのであります。即ち教義に立脚した根本的な活動は、是れを外にして求め得られん事を知ると共に、大なる喜悦を感ずる事が出來たのであります。

二

然し四十年祭は大正十五年の一月に行はれるのでありますから、今年からは未だ滿五ヶ年あるのであります。一寸考たらばあまり此の匂掛けは、早やきに失するが如く思はれるのでありますが、然し深く考たら、却つて遲れ過ぎてゐるのであります。それは神様が御本席に入り込んで、三十年祭の匂掛をせられたのに比べたら直ぐ分る事であります。

御承知の如く二十年祭は、明治三十九年の一月に行はれたのであります。然るに御本席は其の翌年の四月に、三十年祭の匂掛けをして置れたのであります。そして『十分のものなら八歩までたつてしまうた』と仰せになり、又『年限と云ふ、三十年祭〳〵』とも仰せられた。是れは無論本部の普請をさせなければならなかつたから、斯く早くから匂掛けをせられたのでもあり、

又た御本席が御歸幽になる時が近づいていたからでもありますが、兎に角早くから三十年祭の匂掛けをせられた事は、事實として動かす事は出來ません。

御差圖に依つて其の當時の事を考へて見ますと、世界の狀態と云ひ、道の有樣と云ひ、丁度現在の狀態と同じ事になつてゐるのであります。今それを少し申しましたら、明治卅七八年頃は、日露戰爭の影響を受けて、一時非常に人氣の好かつたのが、三十九年頃から變動を來たして、四十年頃は人氣が極度に沈靜してゐたのであります。是れは歐洲戰亂の影響を受けて、日本の財界が昂騰していたのが、昨年以來の變動で、人氣が急に惡くなつてゐるのと、極く似て居るのであります。道の有樣から

中ましても、其の當時本部は世間の影響を受て、年々壹萬貳千圓の喰ひ込みをしてゐたのであります。それと同じ樣に現在の本部も、四十年祭に對する、十分の準備をするだけの餘裕はないのであります。是の二點は特に似てゐる點でありまして、此の際本部で四十年祭の匂掛けをせられたのは、決して偶然の事ではないのであります。

然し同じ匂掛けであるが、三十年祭と四十年祭との匂掛けに、少しく相違してゐる點があるのであります。それは何かと申しますると、三十年祭の時には匂掛けと共に、本部の建築と云ふ具體的の方法が、必要條件として附加せられてあつたのであります。そして更に是を完成する爲めの決心が、定められたので

あります。是れは一方に御本席の身上と云ふ事があつたから、直轄教會長が『身を粉にしても』、『草鞋の紐も解かずに』と決心せられたのでありませうが、兎に角本部の普請とその完成の決心とが出來てゐたのであります。然るに今回の匂掛けは、ほんの言葉だけの匂掛けであつて、其の四十年祭を執行する爲に、如何なる方法に依られるのか、又如何なる決心をすべきであるか、其所までは進んでゐないのであります。

然し既に四十年祭の匂掛けをせられる以上、本部としては大體の具體案が成り立つてゐなければならぬ筈であります。故に今後機會ある毎に、其の具體案は發表せられるでありませうが、未だそれは公表せられてゐないのでありますから、何んとも申

す事は出來ません。然し想像に依つて考へますと、地場の擴大も其の一つであらう。管長教育の爲に、教校本科の設立も其の一つであらう。中學校の寄宿舎も其の一つであらう。斯う數へて來ならば、四十年祭前に完成を告なければならぬ事業が、山の如く横はつてゐるのであります。

三十年祭に對する本部の建築は、確に大きい事業であつたに相違ありません。けれども、四十年祭迄に完成せなければならぬ事業は、更らにそれよりも大きい事業であります。是れに對して如何なる決心をすべきであるか、是れは我々教徒たり信徒たる者の、大いに考慮せなければならぬ點であります。

三

四十年祭を迎へるに付て、大規模の計企の下に活動して、御教祖の神靈に滿足して頂かねばならぬ事は、今更ら改めて云ふ迄もない事であります。又地場の榮えが御教祖の理想を實現する、重大なる仕事である事も、信徒や教徒の等しく認めてゐる所であります。從つて今後本部の發表せらるゝ計企に對しては、何れも相當の力を添ふるは明らかなる事でありまするが、それでは未だ足らぬ様に感ぜられるのであります。

何故なら、御教祖が天啓に依つて、本教を立教せられましたのは、云ふ迄もなく世界の人心を洗ひ替て、世の立替へをなさ

る爲めではありますが、然し教義深く考察して行きましたなら、もつと大事な事があるので、其の重大なる一義を闡明する事に依つて、世界立替への聖業が行はれる事になるのであります。然らばそれは何であるかと云へば　地場は卽ち人間の親里である所以を、人類の胸に深く悟らせて行く事であります。

地場が人間を創造せられた大古の故郷である事は、既に教祖の御說き下された所であり、一般に信徒の深く諒解してゐる所であります。然し地場が新人の誕生地であるに至つては、あまり多く會得せられてゐない様であります。然しながら地場が新人の誕生地なるが故に、現代に於いても深き意義があるのであります。

それは如何云ふ譯かと申しますると、土地の遠近に依つて、地塲に歸る度數は異ひまするが、兎に角お地塲に九ケ月通うて、お授けを頂くと云ふ事は、古き自身が新しき神の使用人として生れ變るのでありまして、是れ卽ち新人の誕生であります。從つて其の誕生は神に依つてなさるゝのでありますから、神の子である人間の中にあつても、新人は神に選れたる者と云ふ事が出來るのであります。是れに對して神様は授けを渡した者は、極印を打つて川へ流す様なものである。何處へ流れて行つても、極印の打つてある以上、是は誰れの用木であると云ふ事が分る様に、生れ變り死に變りしても、直ぐ見分けが付くと云ふ意味を仰せられたのであります。然らばお授けを頂いた者は、肉體

上には何らの變化がなくとも、其の心は既に神様の極印が打たれてゐる事を、自ら深く覺悟せなければならぬのであります。

然るに近時は此自覺が、次第に薄らぎつゝある様に思はれるのであります。卽ち授訓を頂いてゐろと云ふ事を、輕く考てゐる者が、次第に多くなつて來たのであります。是れ一面地塲の理を深く聞かず、從つて其の尊さをも見出せないからでもありますが、又、一面授訓せられた者が、日常他人の手本となるべき行が、十分に出來てゐないから、自然人々の心に理を輕くする様な心持を、起させるにも依のであらうと思はれます。然しこれは要するに、地塲に於て誕生したる新人であると云ふ自覺が、少ない所から起る大きな間違ひであります。若し自分が地

塲の子である事を強く悟つて居たならば、決して地塲の理を輕んずる事もなければ、地塲の子たるに恥ずる行ひをすべき筈がないのであります。

以上の意義から考へましても、人間の生れ故郷であり新人の誕生地である、地塲をして榮えしむる事は『親の光を出してこそ道や』と仰せられた通り、本教徒の夢寢にも忘れてはならぬ事であります。更らに又因緣報じの上から申しましても、地塲を『因緣の報じ塲所』とも聞かされて居ります。故に地塲の爲めに盡す事は、やがて又自分が助けらるゝ道であります。

然し地塲の意義は、未だ是だけでは足らぬのであります。今一歩進めて申ますれば、本教の幾百萬の信徒が、朝夕唱ふる所の天理王命、又生死の境にある時、不思議な助けをせらるゝ天理王命、此天理王命とは抑も何を指すのでありますか。理屈や議論の上から云ば、宇宙の實在とか、世界の大靈だとか、種々譯する事が出來るかも知れませんが、我々が先輩から聞かされた所を卒直に云ば、御教祖に對して、神様は天理王命の名を授けられたのであります。然し御教祖は人間の姿を持つてお居でになつたから、世界の思惑もあるからと云ので、地塲に天理王命の名を、授けおかうと仰せられたのであります。然らば日夜我々の唱へてゐる天理王命は卽ち地塲であり、地塲は卽ち天理

王命であります。

現在本教には、四千の教會があり、二萬有餘の教師があり、數十萬の教徒があります。是れ等は皆な何んの爲に存在してゐるのであるか、云ふ迄もなく天理王命の爲めに存在してゐるのであります。又多くの信徒が不思議な靈救を享けてゐるのは何んの爲めであるか。是れ又天理王命の御守護に依るのであります。其の天理王命が地場である以上、教會も教師も教徒も地場の爲めに存在し、信徒は地場の助けを頂いて居るのであります、故に地場を外にして、本教は其の意義を失うてしまうのであります。

右申ました人間の親里と云ふ上からも、新人の誕生地と云ふ

上からも、又天理王の命としても、地場と云ふ事は本教徒の頭上に、絶大の光を放て居なければならぬのであります。更に又其地場に、本教の最高理想である甘露臺が、將來建設せられるのでありますから、此の地場の爲に働くと云ふ事、は卽ち甘露臺建設の聖業に從ふ事になるのであります。斯く遠き過去遠き將來の上から見ましても、又現在の上から考ましても、本教徒は地場の爲には、懸命の誠を盡すべき運命を荷うて居るのであります。故に地場の事に關しては、それ相當の盡力ぐらいでは滿足が出來ないのであります。

然し又斯う考へる人があるかも知れません。地塲は今働かねば無くなるものではない、是れから永遠に存在するのであるから、又機會を見て盡せばそれでよい。今は足下に火が附てゐるのであるから、是の事から防いでかゝらねば、地塲の爲めに働くと云ふ譯には行かぬと、考る人があるかも知れません。然し是こそ神一條の道理と、人間一條の道理を先後にしたのでありまして、是は大變な悟違ひであります。斯く考へるのは要するに刻限と云ふ理を知らぬからであります。

刻限と云ふのは御教祖在世中は無論の事、御本席の時代になつても、夜々刻限を以て御差圖があつたのであります。それは如何云ふ事かと申しますと、神様が今は斯く〳〵の事をすべき

時であると云ふ、其の時機を教へて下されたのでありまして、例へば老農が若い衆に、今は種を蒔くべき時だとか、今は修理をすべき時だとか、今は收穫すべき時だとか、其の旬々の事を教るのと同じであります。其神様の差圖に從つて、信徒や教徒が働いて、本教が成立して來たのであります。それ故に御差圖の中にも『神が一つはなし、それを人間が果して行く』とも仰せられてあります。斯く本教は神様と人間が、共々力を合して組立てゝ來たので、其の當時の御道の勢ひは、恰も遼原に火を放つた様に、焰々として擴まつて行つたのであります。

然るに明治四十年の六月に、御本席が御歸幽になつてしまつたので、此刻限を聞く事が出來なくなつてしまつたのでありま

す、それで一時は其の歸趨に迷た有様でありましたが、然し今日になつて靜かに考へたならば、御本席二十年の御差圖に於いて、本教がそれ以後通るべき大體の雛形を、殘して置て下されたのであります。又御教祖御歸幽の時と違つて、道の者も相當成人して來て居るから、十年の差圖を百日につゞめてお殘し下されたのであります。

此等の御差圖の上から考ましたら、我々が刻限を知る道は、神様の御言葉以外にも見出す事が出來るのであります。例へば病氣の時に神様の御差圖に依らなくとも口で云ふよりよく分る様に身上に現はしてある』と仰せられた通り、病む身と心使ひと事情とから考へたら、神様の思召が大體何處にあるかを個人の

上に付いて悟らして貰へる様に、地場は神様でありますから、地場に現はれる理をよく思案したら、神の意志が其所に悟れるのであります。

六

然るに多くの人は地場と云ふても、其の深い理を究めずに、唯天理教を統一する一つの機關か何かの様に考て、地場に歸つて來ても、建物を見物したり、地場に勤てゐる人に會うたりして、それで地場が分つた事の様に思うて、地場の理を少も悟らないから、神様が地場に現れて、不思議な刻限の理を示てお出でになるのを見分けられないのであります。神様の御言葉に『屋

敷は神の屋敷、神の支配、神の儘』と仰せになつた事があります、是れから考へても、地場は神様が自由に支配しておいでになるのが分るのであります。それを人間が相談して、萬事行ふが如く思のは、それは思ふ方が間違つてゐるのでありまして、神様も『相談の決は神がするのや』と仰せになつて居ります。故に地場に勤めてゐる人々は、神の道具として、道具相當に神様が入込で、お働かせになつて居のであります。それならこそ『地場から打ち出す言葉は天の言葉や、あんな事と云へばあんな事になつてしまふ』と仰せられたのであります。

是れ等の事から綜合して考へましたら、地場で現れる事は凡て神意でありますから、今地場で如何なる事が行はれて居るか

と云ふ事が分れば、今は如何なる事を爲すべき時であるかと云ふ事も分る筈であります。此の刻限が分つて働いてこそ、神人一手の働きが出來るのでありまして、神様の思召しが分らずに、勝手な思案からどれだけ働いても、之れは『理の無い働き』で『無駄靈しの無駄働き』になるのであります。然し本教の内に是の他場の理が分らぬばかりに、折角働いて居ながら、無駄働きをしてゐる人が澤山あるのであります。是れは實に氣の毒な人達であります。

斯く地場に現れる理によつて、刻限が分つたならば、其刻限の理に從うて働かねばならぬので、刻限を失つてしまつたならば、折角の理が消えるのであります。例ば人の家へ手傳ひに行

くにしても、忙しい時に行けば其の家では喜ぶが、暇な時になつて手傳ひに來ましたと云うても、却つて其の家を困らす様な事になる。それと同じで刻限をはづしたら、善い事も善いに立たず、悪い事も悪いに立たぬ様になるのでありますから、此の道理をよく考へて、刻限の理に從はねばならぬのであります。

若い信仰の人々には、神様の方が如何なつてゐるか、其の方の話しは少しも聞かずに、本でも讀んで、自分獨りで善い事をすれば善いのだと早合點して、却つて神様の爲にならずに、神様を苦しめる様な事をする人を見受けますが、是れなどは全く此の刻限の理を悟らぬからであります。

然らば今本部で如何なる事が現れてゐるかと云へば、本部は

公に四十年祭の匂掛けをせられたのでありますから、必らず此の四十年祭に付て、種々相談せられてゐるのであります。從つて其の計劃は、前にも申た通り、追々發表せらるゝに相違ないのであります。然らば本教に屬する、一切の教會、一切の信徒は、此地場から流される理に深く注意し、以て自分の働きの定木として行なければならんのであります。斯くなつてこそ始めて、本教が一手一つの活動が出來るのでありまして、神様の御働きも、必ず顯著なるものがあるに相違ありません。

然し是れは要するに四十年祭迄に、如何に働くべきかと云ふ順序の道筋を明かにしたのでありまして、刻限の理に從うて働くと云ふ事のみが、全部であると云ふ譯にはまゐりません。何

故なら同じ様に働く中にも、其の心と云ふものは一人限り異ふものであります、從つて如何なる心を以て、刻限の理を運ぶべきか、卽ち一言で云へば如何なる心定めを是の際なすべきか、是れが各人目下の問題であります。

七

然し心定めは各人の自由でありまして、他人が强要すべきものでもなく、神様も『どうせ、かうせこれは云へん』と仰せになつて居りますから、各人が自ら定めるより外は無いのであります。然しながら本教には教祖五十年の雛形があるのでありますから、如何なる心定めをするのにも、此雛形に準據して定めたならば、過失なきは云ふ迄もないのであります。殊に四十年祭は御教祖の神靈に對する祭典で、是は普通の年祭として考へても、故人を偲ぶ爲めに行はれるのでありますから、此の際御教祖五十年の道筋を想起して、我が心定めの定木とする事は、何よりも必要なる事であると信ずるのであります。

然らば御教祖は如何なる道を通られたかと云ふ事になりますが、五十年の經歷を逐一述る事は、此の場合容易な事でなく、又多くは既に御承知の事であらうと思ひますから、其の經路は省略して、直ちに御教祖の精神に付いて申し上げます。

御教祖がお通りになつた、五十年の道筋は、實に容易ならぬ道でありまして、或る時は縲紲の辱めを受け、或時は貧のどん

底に陥り、或る時は親族の反對を受け、或る時は狐狸と罵られ、實に人間としての不幸を一身に集められたかの觀があります、然し斯した出來事は、御教祖御自身から採れば、通られた道すがらでありまして、其の道すがらを踏まれた御教祖の心は、多くの人は見出さずに居るのであります。例へば鐵を叩けば火花が散ります、其の火花の美くしさを知つて、鐵そのものゝある のを忘れた如きものであります、故に御教祖の道すがらの尊さよりも、其の道すがらを通り拔けられた、其の精神の更に尊き事を知らねばならぬのであります。

如何なる障害、如何なる困難、如何なる苦痛が出て來ても、これが爲めに妥協もなさらず、一歩も退かず、ぐん〳〵進んで

行れた、其の力强い態度を想ひ出す毎に、必ず涙ぐましき悲壯な感じが起つて來ます。と云つて唯無暗に强いと云ふのではなく、親が子の可愛さの爲めに强くなる樣に、其内には深い〳〵慈悲が滿されて居るのであります。其の慈悲の前に、何人も其の身も心も、棄げ出したい心が湧いて來るのであります。其所に御教祖の比類なき心を、我々は拜する事が出來るのであります。」教理に依つて考へますと、御教祖は人間の親たる靈魂の因緣を持つて居られるのであります。御教祖が世界助けの爲めにあれだけの苦勞、あれだけの苦行をせられたのは、全く親の因緣があつたからで、他の者が到底眞似の出來るものではありません。それならこそ神樣も『もう一人教祖だけの道を通る者はない』

と仰せられて居ります。それで『十のものならば二分三分通つてくれたら、あと七八分は親がたして十分として受取つてやらうと』とも仰せになつてあります。是れから考へても如何に御教祖が、困難の道を通られたか想像する事が出來るのであります。

然かも其の道は誰れの爲めに通られたのであるかと云ば、教祖は好いて通られたのではなく、全く神様の思召しに依て、世界の人々を助けんが爲であります。後世本教に依て、多くの人が助けられるのは、全く御教祖が屈せず緩まず、雛形の道をお通り下されたからであります。此の道筋を、眞に自分の通る雛形として考へたら、其所に無限の感謝の念が湧くのであります。何故なら一年二年世話になつた人にさへ、人は其の恩に對して

心から感謝するものであります。況んや自分を助ける爲めに、御教祖が五十年御苦勞下されたのであると分つたら、それこそ何んとも云はれぬ嚴かな、勿體ない心が起らねばならぬ筈であります。

其の御教祖の御恩に報ゐる時は、此の際を外にしては又得難いのであります。何故なら、人間と云ふものは、何時如何なる事が出來て來かも知れないのでありますから、四十年祭を行はるゝと云ふのは、是れ全く我々教徒に報恩の機會を與へられたのであります。それで我々は深く御教祖の御心を推察して、其のお心に滿足を與へるだけの、心定めをせなければならぬのであります。

八

思ふに此の四十年祭の聲を聞くと共に、眞面目に此の道を信じてゐる人ならば、必ずそれに對する心定めとまでは云へなくとも、斯したいと云ふ思ひが浮ぶに相違ないのであります。そして或る人はそれが爲めに布教に出るであらう。或る人は教會の新設を急ぐであらう、或る人は教會の方針を改めるであらう、又或る人は自分の好きな心を捨てるであらう。其の方法は其の境遇が異るに隨つて、千差萬別であるに相違ない。其れに對して彼れは是なり是れは非なりと云ふ事は、第三者の斷じて語るべき事でない。何故なら神様は『受取る筋も千筋や』と仰せら

れて居るからであります。

然し神様の仰せに『望みは大きもて、大きいものは半分出來ても大きい。小さい事は皆出來てもしれたものや』と仰せにつた事があります。是の上から考へましたら、心定めをするには、自分で是なら出來ると思へる以上の事を定める事が必要であります。何故なら『出來る事は出來ん、出來ん事が出來る』と仰せられた様に、自分で出來ると思ふ事は、左様思ふ事が既に神様の力を無視してゐるから、却つて出來ぬ事になるので、出來んと思ふ事は神様に縋る心があるから、其の事は成り立つて來るのであります。故に自分の力で出來にくいと思はれるだけの、大きい心を定める必要があるのであります。

斯う云へば、大きい事なら神様の御心に適ふ様に、直ぐ早呑込をする人があるかも知れませんから、心定めをする上に二つの重要なる事があるのを申して置ます。心定めをして、それが神様の御心に適うた時は、其の心に何んとも云へぬ悦びが湧いて來ものであります。即ち神様の御心に十分として受取られたら、其の證據として、人間の心に勇んだ理が出て來ものであります。故に心定めは此の悦びが、心に湧く所まで定めなければなりません。

次ぎには心定めをしたならば、其の必然の結果として、種々なる困難が現れて來と云ふ事であります。望みが大きければ大きいだけ、それだけ苦痛も大きいのであります。故に大きい働

きをして、大きい理を積たいと思へば、それだけの苦痛を受て通るだけの覺悟をして行かなければならんのであります。然し苦痛の後には、必ず神様が近よつておいで下さるのでありますから、其の苦痛さへ通り越したら、必ず幸福が與られるのであります。故に是を要約すれば、心定めは内に於いては、大なる喜悦を感なければならず、外に對しては、大なる苦痛を見なければならぬと云ふ事を覺悟して、成るだけ大きい望みを持つ事が必要であります。

本教五百萬の信徒乃至教徒が、此の上から各自心定めをして、氣を合せ心を揃へて活動したならば、それこそ凄い様な勢が出來るに相違ありません。又神様は『世界には此の道のついて來

るのを、手を拍て待つてゐる所である』と仰せになつて居ります。すれば此の四十年祭を機會として、地塲一つの理を心に治め、教祖五十年の道を頭に頂いて、眞劍な『身を粉にしても草鞋の紐も解かず』といふ心で働いたならば、如何なる大事業も、必ず完成し得られるのであります。

本教教師として教會長たり役員たる者は云ふ迄もなく、布教者や教徒信徒に至るまで、深く此の趣旨を味つて、今後滿五ケ年の間、職にある者は其の職に、助にある者は其の助に、身を以つて殉ずるの覺悟をし、四十年祭には心から地塲に相會して神人共に樂しむの極樂境を實現せられむ事を、私しは心から希望し且つ憧憬するものであります。

授訓の考察

授訓の考察

今回の講習會は、本教に於ては未曾有の出來事であり、且つ四十年祭に對する根本方針の教示でありますから、其の席上に於て講話をするのは、信仰上の經驗淺き自分の、到底任に堪ぬ事であります。それで私しは、常に明かにして置たいと、心懸けて居りました授訓の事に就て、私しの研究致しました所を、お話し申して其の責を果たしたいと思ふのであります。然し何を申ても、今日としては、事凡べて歴史上の出來事に屬するので、其の當時から、此事に關係のある方に尋ねるか、記錄に依

て推定するの外はないのでありますから、此の點は豫め御承知置きを願ひたいと思ふのであります。

次に尙お斷り申して置なければならぬのは、等しく授訓の考察でありますが、其の方法に二つあることであります。其の一つは、授訓の意義を教理上なり實際上なりから研究して、其の價値を明かにして行のと、今一つは、現在本部で行はれてゐる授訓が、如何なる經過を得て來て居か、卽ち其の歷史的方面を研究して行くのとでありまして、私の今日お話申すのは、其の後者卽ち歷史的の考察をするのでありますから、是も前以て御承知置き願ひたいのであります。

それから更に、此の授訓の經過は、今日まで殆ど研究した人

もなければ、話としても多く語れた事もないのであります。從つて、全く神秘なものであるかのやうに、宗教的尊仰を以て視られてゐたのであります。それで私は常に之れを明かにしたいと希望してゐましたが、何分月日が長く經過してゐますので、時日などの不詳なのが澤山ありますから、之れについては先輩の教示を切に願ふ次第であります。

それでこれから授訓のお話に移るのでありますが、何分に話す時間が、僅に一時間よりありませんので、詳しくお話申す事が出來ません。本教に於て最も深い意義を持てゐる、此の授訓の成立を、今回の如き好機會に充分申上げられないのは、私しの尤も遺憾に思ふ所でありますが、それも致方がありませんか

ら極く大略を、それも殆んど斷片的にお話致しますから、その心算でお聞き下されたいのであります。

そこで、此の授訓に關して、第一に考なければならぬ事は、抑も何時から此の授訓が始まつたかと云ふことであります。併し此の起源に關しては、明かに知る事が出來ないのでありますが、口傳に遺つてゐるのに徵しますと、仲田左右衞門様が授訓を頂かれた最初の人だといふ事であります。さう致しますと、同氏の入信は文久元年で、年譜によりますと慶應元年八月十九日に山中忠七氏に肥の授けをお渡しになつて居ますから、それは元治元年の前後であつたといふ事だけは推定せらるゝのであります。其の時同氏に授けられた授けは、肥の授けであつたと

云ふ事であります。

次に教理上に現れてをりますのでは、御神楽歌の一下り目の始めに、『正月こゑの授けはやれめづらしや』とあるのが始めで、此御神楽歌は慶應三年の、一月から八月までの御製作でありますから、此の前にお授けのあつたと云ふ事は明かであります。

それからお授けの種類と其の起源でありますが、先づ其の種類から申しますと、私しの聞てゐる所では、肥の授、息の授、水の授、甘露臺の授、惡き拂の授の五種であります。其の中、肥の授けには半肥と全肥との二種があり、水の授けには唯水の授と、供水の授けとの區別があり、甘露臺には澄ますと澄ましてとの相違があつたとの事であります。なほ此の取次の方法な

り用途に就いて詳しく申せば好いのでありますが、時間がありませんから省略して置きます。

それから其の種類の起源でありますが、悪しき拂ひのお勤めが、明治元年に始られたのでありますから、悪しき拂ひの授けは、其の以後と見る事が出來るのであります。又、甘露臺が始て出來たのは明治六年でありますから、甘露臺の授けは其の以後と思はれるのでありまして、澄ましてと呼直されたのは、明治十五年五月十五日に、警官が甘露臺の石を沒收してよりであります。息の授けは中田氏が始でありますから、同氏の入信後でありますが、何時頃であるか確な事は分りません。水の授けは其始めが判らぬのでありますが、供水の授けは松村氏が授け

られたので、之れは明治二十一年一月であります。

斯様に神様は種々異つたお授を、お渡しになつたのでありますが、怎いふ譯で斯うした相違があるのであるか、其の理由はどうも判りにくいのであります。何れ將來は研究せられる時もあらうとは思はれるのでありますが、現在では然うした異つたお授けがあると云ふ事だけを、覺えて置いて頂きたいのであります。

以上は御教祖在世中に於る、お授けに就いて申したのでありますが、現在一般信徒に授られる授訓は、御教祖の遺鉢を繼がれた、御本席に依つて授けられたのでありますから、此の點に就て詳しく申し上げて、授訓なるものが如何に苦心の結果、現

在の如き形式に依て授けられるに至つたかを、御承知願ひたいと思ふのであります。

御本席は御教祖在世中は仕事場と仰られて、天啓があつたのでありますが、明治二十年御教祖御歸幽後も、其の天啓は變る事なくあつたのであります。然るに舊三月一日に『國々から先々まで受取りたる所もある、それ故渡すものが渡さなんだが殘念な殘念な』と仰られた。之れは、御教祖在世中に、心の眞實を受取て渡してやりたいものがあつたが、それを渡さずに御教祖が御歸幽になつた事を、殘念なと仰られたのであります。それで仕事場では渡すものが渡せんから、今日から本席と改めるが承知かと仰られて、お授けをお渡し下さる樣になつたので『此

の渡しものは天からやで』と其の時仰せになつてをります。

御本席がお授けをお渡し下さる樣になつて、最初に頂かれたのは西浦彌平と云ふ方であります。それは或る夜、中南と云ふ御本部の舊門の、西側にあつた居間に居られた御本席が、彌平さんを呼んで來いと仰られる、然るに其の時御本席の側に居れたのは、御本席の御家内のお里樣と、娘の政枝さんとの二人であつたので、園原の彌平さんを呼びに行く事などは到底出來ない。それで其の理由を申してお斷り申されたが、神樣が御本席に入り込んで、怎しても御承知がありません。そこで仕方がないから、甘露臺へ行てお願ひ申さうと、二人で外へ出て見られると、甘露臺の前で一心に拜んでゐる人がある、よく見るとそれは彌

平さんであつたので、喜んで御本席の所へ連れて行れると、御本席からお授けをお渡しになりました。之れが御本席の始めてお渡しになつたお授けだと云ふ事であります。

爾來、何千何萬といふ程、多くの人にお授をお渡しになりましたが、始の間は現在行はれてゐる様な、別席と云ふやうなものは無かつたので、身上に障りが付て神様にお伺ひすると、お授けを下されたのであります。又、先生方に身上のお伺ひをして頂いた場合は、席を許すといふお言葉があつたら、其の人を連て御本席の前へ出ると、授けをお渡し下さつたのであります。

以上申したのは身上の伺から頂く場合でありますが、身上でなくお授けを頂きたいと云ふ上から、お願ひする様な場合には、

直ぐ其の場合でお授け下さる場合もあれば、『さあ〳〵すみやかなる所尋ね出よ』と仰になつて、家々の治まりをつけるとか懺悔をするとかしてお願ひ申すと其の理を見分てお渡し下されたのであります。從つて神様の御心に適ぬと、三度四度運んでも頂けない人もあるので、或る人の如きは、十二度目にお授を頂いたと云ふ事さへあります。斯いふ譯でありますから、其の當時は一人々々、神様が其の心を吟味して、お授をお渡しになつたものと思はれるのであります。

處が授訓を願ふ者が次第に多くなりますので、御本席から一々理を說き聞かした上、席を許と云ふ事が出來なくなつて來ましたので、心に理の治まる所まで、先生方が御話を取次がれる

様になつたものと思はれるのであります。そして心の懺悔が出來たのを見分て、神様にお願ひせられると、お授をお渡しになつたものと見て、明治二十二三年頃の授訓願ひに對して、お渡しになつたお授の言葉には、『だん〳〵の席』とか『返し〳〵の席』と云ふ御言葉はなく、『一つ席をもつて』と云ふ事になつてをるのであります。

然らば其の取次とは、何時頃から始つたものであるかと云ふ事になるのでありますが、明治二十一年の八月六日の刻限の御話の中に、此の取次に關する御差圖があるのであります。それに依りますと『取次ぎの理に依つて働く天の理や』と仰せになり、取次の意味については『取次ぎ親の使なら親の代りや』と

仰せになつてをります。そして其の仕事に關しては『二度三度洗うて三十日かゝるものもあれば、二度三度と云うて二月三月又一年かゝるものもある』と仰せられてをります。之れから考へますと、二三度御話を聞かされる事になつてゐた樣に思はれるのであります。そして最後に『取次に理をまかせば、取次よりしつかりとしまりてくれるやう』とあります。之れは取次が見分けて萬事取扱ふ事を意味してをられるのでありますが、此の刻限から考へますると、此の當時既に取次の話があつたものと云ふ事が出來るのであります。

それから其の年、即ち二十一年十二月二十五日の、御本席御身上の障りからお伺ひしてある中に、恁いふ御言葉があるので

あります。『さあ〳〵〳〵〳〵もう一事〳〵、さあ〳〵〳〵〳〵もう一時二度三度〳〵〳〵、さあ〳〵一度〳〵が三さんでさだめる。一度三三で定める〳〵』とあります。併し此御言葉では何の事か其の意味が充分判り悪いので、押してお願ひせられたのに對して『一度が三十日、又一度が三十日、又た一度三十日、さあさあ三三三でつとめればそれが十分である』と仰せになつてをります。そして更に『三三三の理をもつて見分け聞分けがむつかしいで』と仰せになつてをります。此の御差圖から考へますと、此の時から御話を三度せられる様になつたやうにも思はれますれば、九度の席になつたやうにも取るのであります。處が口傳に依ますと、九度の席といふのは、明治二十五年の始の頃か、

二十四年の末頃からであると云ふ事でありますから、先づ三度で、それは三十日即ち一ケ月に一度運んで、三度濟んだら取次が其の心を見分け聞分けて、お授の運びをせられたものと思はれるのであります。

それから明治二十二年一月二十六日のお伺に、左の如き御伺ひがあるのであります。前御差圖に依て取次中談じ、一日の席人は一年信心の者、又常番を定め人數も定十四人、席人凡里程を定め何度して神様御伺』といふのであります。此伺の言葉は甚だ意味の取悪いもの であります、此の前の御話といふのは、前の刻限の御話であろ事は判つてゐるのでありますが、何の言葉が角目の理に當てゐるのか、容易に判らんのでありま

すが『成る理がむつかしいやない、ならん理がむつかしい、ならん中より運ぶ中の心の此の理が深きといふ』とある御言葉からではあるまいかと思ふのであります。併しそれは兎に角として取次人相談の上、此の時から別席人は一ケ年信心した者、取次人の當番を置て其の人數を定められた事、席人は道の里程の相違に依て、何度か運ぶ相違のある事の三點が、確定なつたのであります、が、其の伺ひに對して、『先々枝先一つはじめだし、一つ心を定めさせば、一つ心あざやかと云ふ。遠く一つ、石も立木も分るであろ』と云ふ御諭しがあつたのであります。

それから明治二十二年の四月二十七日の刻限に、『さあ〳〵暫くの所授をとめる〳〵、聞かせども〳〵なんべん聞かしても、ざ

をくずしてどふもならん、とめてしまふのやけれど日に三名、さあさあ日に三名ならなんどきでもゆるす』と云ふ御言葉があります。之に依ますと、御本席の前へ出てお授けを受る人が、一日に何人と定まつてゐなかつたものと思はれます。處が多くの人では座を崩すから授けは止やうと思ふが、一日に三名だけは許すと云ふ事になつてをります。即ち一席三名と云ふ事は此の時から始まつたと思はれます。併し此の三名と云ふのも、絶對的のものでないと見えまして、『さあ〳〵暫くの所や、又すつきりとなにもかも許す日があるで』と仰せになつてをります。

其の後遠國からお授けを頂きに歸つた者が多かつたので、一日一席の處を、特別に二席お願せられた事がありました。が一

度は、『暫くの事上、一つぜひなくの理である。』と仰せられ、一度は『今度の刻限まで、一ノの理は許す事出來がたない』と仰せられて、一日一席三名よりなかしがなかつたのであります。所がその年の七月三日、御本席様が御腸下り御障りにて御伺せられた時『三名定めたる所、まちらこちらから三名、三名一度の席六人まではすみやかゆるす　八人の席二度にゆるす、取りまぜてはならんで、席は分けねばならんで』と仰られて、一度二席に六名をお許し下されたのであります。所が授訓者が次第に多くなつて來ますので困つてゐられたと見えまして、明治二十二年九月二十四日の刻限の話に『日々の處三名にせまりて又三名、六名として思ふやうにいこまい、なれど暫くの所、ひつそ

ひつそにして』とあります。之れは六名でも思ふやうにいこまいが、暫く其の儘にして置けと仰せられたのであります。

所が同じ刻限の中に『暫くの處、もとの三名、取次たつた二名』といふ御言葉があります。此の御言葉から推して考へますると、此の時授訓の席に立ち並んで取次ぎをせられたのが、二名であつたと云ふ事が判るのであります。

それから明治二十二年の十月十七日に、『本席の事上だん〳〵つかへて別席の處も日々人が増す、そこで遠く所は三三の理を以て二席したら二ケ月すんで、別席する事に改めて御許し下され候哉』と云ふ伺ひがあるのであります。それに對して神様は『遠くの所、一度運んでじつと置き又一度、處々まことを治

め』と仰せられ、又『遠くの所二度運んで、遠くの所三三九度一つの理を事上治め』と御許しになつてをります。それから又同差圖の中に『又一つこれまで三名の處、さあ一度、夜に一度筆取二人、取次一名名前呼出し一名、四名許さう』と云ふ言葉があるのであります。此の御言葉から考ますと、前の取次二名といふのは、授訓の取次と名前呼出しの二人であつた事が判るのであります。そして此の時から筆取、即ち神様の言葉を書取る者が二名許されたのであります。

然るに、その翌年即ち二十三年の一月に、奈良警察の巡査が二名、布留の巡査と共に村内に入込で、探偵する様子が見たのであります。それで本部の方々は大變心配せられた様子であり

ます。所が同月の十三日の御差圖に、『席にかゝる、心からどんな理もつてくるやら分らん、そこで見分け聞分けてくれ』と云ふ御言葉がありました。それで此が動機となりまして、初試驗が行はれる様になりましたので、それは初席の者は會長様即ち前管長と、事務所一名、先生方一名、都合三名立合の上、身の内話しと八つの埃を說かせて試驗し、試驗濟の者は別席にかゝる、又本席へ出る時も同様にして本席を取扱ひ、若し試驗に落ちたら日延をして、又試驗をする事に決定められたのでありまして、此上から考へますと、本席へ出る時にも試驗があつた様でありますが、之れは詳しい事は判り兼ねて居ります。それから、初試驗に身の内借物の話と八つの埃の、說分けをさせられ

たといふ事は現在も同じ事でありますが、其試驗があまり嚴重であつたので、席を運ぶ者が困ると云ふ所から、後には管長公も事務所からも、立ち合はぬ事になつたとの事であります。

それから明治二十三年七月十三日、御本席の齒の痛みの願ひから、恁いふ差圖があつたのであります。『助け一條の理を渡す、だんだんの授けと云ふ、何程なりと運ぶがよい、一日に事上は三名よりならん、さうして席の處へ立ならぶは、すつきり二名と定める一名は願ひ、一名は書取、一人に二人の事上さづけにやならん、三名は又假席へ入れる、事上すみやか改めて、三人の席を許さう』と云ふのであります。假席といふものは此時が始めで、取次二名が三名に許されたのであります。

なほ此の時に改められた事は、書取が渡されるやうになつたことでありまして、それを『これ迄の處、長くの事上は諭さん、早くしてしまふ、早くして其の時々受取つてくれるがよい』と仰せられ『書取の處は何時でも出來るであろ』とあります。之れに依りますと、長い事上は諭さんとありますから、お授けに就いての諭しはせん、授けだけを早う渡すと云ふ意味であらうと思ひます。そして『書取の處は何時でも出來るやろ』と仰せられたのは、諭しの言葉は先からでも書いて置けると云ふのだらうと思はれるのであります。即ち、其の場で書取つた書取と、他の書取と共に渡すことになるのでありまして、それは其の翌々日、即ち十五日のお授けの後の御話に『さあ〳〵之れ迄の書取

渡すのや、渡すのが第一やで、あとより渡すのが第一かんじんやで、さあこれ迄の書付はみんな渡すのやで、さあこれから先の書付は、皆一人〳〵の心の理に又さとすに依て、これ迄の書付とそれに添て、あとで書付渡すのがかんじんや。』と仰せになつてをります。

それから以後には殊に變つたと云ふ様な事はなかつたやうでありますが、明治三十一年五月十二日の御話に、『長い話した處があいてくる者が出來る、そんな席なんぼしたとてどうもならん、そこで九へんといふ、九へんさへおふたらよいと云ふだけではならん、同じ事九へん聞したら、どんな者でも覺えてしまふ、まち〳〵の理渡してはならん、一と云うたら一、二と云う

たら二、三と云うたら三、きつちりしたものやろ』と仰せになつてをります。此の御言葉から、別席の御話が一定になつて來たものであらうと思ふのであります。

それ以後は、取扱の上に就ても、別段變つた事は無つた様であります。唯三名一席の處が特別一席、又一席となつて三席九名まで御運び下さる事になつたゞけでありますが、後には更に授訓者が多くなりますので、一日に何席も運んで頂けるやうになつた事などがあるばかりであります。現在行はれてゐるのは其の當時と同じであります。

尚、此お授けに關しては、お話申上げたい事が澤山あるのであります。又それは皆様として心得て置れねばならぬ、性質の

ものであらうと思ふのでありますが、何分時間がありませんから、何れ又機會がありましたら其の節お話申す事に致します。

それで最後に私の中上げたいのは、近時此お授けと云ふものを輕んじる樣な傾向が、生じて來た樣に思はれる事であります。無論誰一人として輕しめる心から輕しめるのではありますまいが、理を取違へるから輕しめてゐる理になつてゐるのであります、と云ふのは、理を頂く事を忘れて、別席に行ても話だけを聞いて、理で心を洗うて貰ふと云ふ事など、殆んど考へてゐない有樣であります。從つて天の理の働くのも薄うなつて、不思議珍らしいと云ふ理が少なくなつて來てゐるのであります。

神樣の御言葉に、『これ不思議といふは道である』と仰せにな

つてをります通り、此の道は言葉の上手や方法でついて來た道ではなく、不思議珍らしい助けから出來て來たのであります。故に今後も、道が大きくなるには、此珍らしい不思議の理が多く現れて來なければならぬので、それには天の理に働いて頂かねばならぬのであります。卽ちいくら人が働いても、此天の理が働かなかつたら、世界の道や世界の教と同じ事になつてしまふのであります。

所が此お授けを頂いた者は、神の働きをさして頂く用木でありますから、此のお授け人が眞實に働かなければならぬのでありまして、それにはお授けといふ理を徹底さして置かなければならぬのであります。又、理といふものは重くとれば、どれだけ

働くとも分らんと仰せられてありますから、此のお授けの理を重く取つて、天の働を受けて行かねばならぬのであります。

多分松村先生から、四十年祭の活動の御話に、倍加運動と云ふ事をお説になつた事と思ひますが、四十年祭までに本教を倍加せしむることは結構な事でありますが、其の方法としては、此助け一條のお授けの理に依て働くのが、私しは尤も大切な又意義あるものであらうと思ふのであります。何故なら此の身上一條の上から付いた者でなければ、根のない花も同じでありますから、宣傳や廣告よりも、此の授け一條の上から、身上助けの上に全力を注いで行かなければ、充分効果あるものは得られまいと思ひます。

本教が現在の如く根柢の深い勢力を養ひ得ましたのも、要する所は此のお授けに依る、助け一條からでありますから、今後も本教は此の上に立つて働くのが正しい道だらうと思ひます。

皆様は自ら此のお授けを頂いてをられる方であるばかりでなく、各教會に於て、お授け人を指導して行れる方々でありますから、此の際此のお授け一條について深く思念し、以て助け一條の上から、四十年祭の御活動を願ひたいと思ふのであります。

私しは、此の一事をお願ひして講話を終ることに致します。

地塲の意義

地場の意義

立教の意義

神様が本教をお始めになつたのは、如何なる譯であるか、多くの人は世界の難義している人を助け、世の中を立替へる爲めに、神様がお開き下されたと思ふているのであります。然し單んに人を助け世の立替へするだけならば、本教が現れて來なくとも、昔から宗教が澤山あつて、それが何れも世の立替を說き人を助けているのでありますから、別段其の必要が無つた譯であります。然るに本教が開かれたと云ふには、其所に必らず深

い理由がなければならぬのであります。

然らば其の理由は何んであるか、それは『神の思惑』を説く爲めであります。即ち神意を人間に傳へる爲めに、教祖を神の社として、此の道を始められたのであります。然し更らに深く考へて見ますと、神の意志を人間に傳へられたのは、獨り教祖のみではありません。凡そ一宗を開いた人々は、何れも神意を悟つて其の教を開いたのでありますから、唯だ單んに神意を説くと云ふのみでは、未だ其の理由としては薄弱であります。けれども同じく神意を説くと云ふても、其の間に非常に相違のあることは事實であります。

是れを極ぐ分り易く他の教と比較して見ましたならば、佛教

の創立者である釋迦は佛陀と云ふのでありますが、此佛陀と云ふのは覺者と云ふ意味でありまして、即ち世の中の悟を開いた人と云ふのであります。此の世の中を悟ると云ふのは、天地間の現象を見て、其眞を悟るのでありまして、是即ち神の働きから神の意志を悟るのであります。從つて神自らの意志と、果して合致するや否やは、容易に知る事が出來んのであります。

次に基督教の開祖である耶蘇でありますが、耶蘇は何んと云ふて教を説いたかと云ふに、我れは神の愛子である。神我れを遣はしたと云ふているのであります。是れ即ち神が其の意志を傳達せしめん爲めに、其愛子を人の世に送つたのであります、從つて神自身の意志が、充分に傳へられたか否かは分らぬので

あります。

然らば教祖は何んと云ふて教を説れたかと云ふに、教祖は神が表へ現れて、何か委細を説き聞かすと仰せられたのであります。即ち教祖を神の社として、神自ら其意志を教祖の口を借りて説かれたのであります。故に三者の相違は、神意を悟つたのと、神意を傳へる使者と神自ら其の意志を語るのとの相違があるのであります。斯く本教は神自ら表れて、此の教を説れたのでありますから、本教を止めの教とも最後の教とも云ふので、要するに是れ以上の教は現れぬ事を意味せられたのであります。

斯く神自ら表へ現れて、其の思惑を説いて聞かされたのでありますから、道徳的の批判を下す事は出來ないのであります。

其神意が善であるか悪であるかなどは、問ふ必要がないのであつて、唯其の思惑を聞いて其通り從つて行くのが、神に奉仕する者の勤で、それが即ち此の道であります。

然るに多くの人の中には、此神の思惑を悟る事を忘れて、教理にのみに囚はれている人がありますが、これでは道の生命を失ふのであります。獨り本教のみではなく、他の宗派に於いても此の一義を失ふから、折角の教が屍の如きものとなるのであります。故に宗教に於いては此の神意を悟ると云ふ事が、一番大切な事であつて、本教に於ても此の神の思惑を説かれる刻限を、最も重要視せられたのは、蓋し當然の事であります。

然らば神の思惑とは如何なる事であるかと云ふに、是れは人

間の心が日々變化して行く様に、神の意志も變化して行くものでありますから、十年以前の神意が、直に現在の神意であると云ふ譯には行ぬのであります。然し凡ての物が變化し流轉する中に、不變のものがある様に、變化する神意の中に、不變なるものが存在するのであります。從て神の思惑を說き示されたる教理も、此の二つの相違のあるのは止むない事でありまして、變化して行く方が刻限の差圖でありまして、變化せぬのは本教の創世說であります。其の創世說から押して最も重大なる意義を持つているのは、私の是れから話す所の地場であります。

地場とは翁婆と云ふので、卽ち人間の祖先を意味するので、現在本教の本部所在地たる、元の中山家の屋敷を指したのであ

ります、思ふに地所に或る宗教的意義を與へられたのは、本教を以て嚆矢とせなければなりません。他の教派に於ても名僧や豫言者の教を說た所や、修業した處や、誕生地などは遺跡となつて居りますが、それは場所それ自身に意義あるのではなく、名僧や豫言者を慕ふ心から、其記念として尊まれているのであります。然るに地場は教祖を離しても、尙ほ獨自の意義を持つているのであります。

從つて本教の教理も此の地場を取り去つては、其の價値を失ふのであつて、云ひ換れば此の地場の意義を明かにする所に、本教の教理の基礎があるのであります。故に教祖の出現は、一面人を救ひ世を助ける爲めでは、ありますが、一面又此の地場を

現はす爲めであつて、此の地塲の意義を鮮明することは、やがて又た人を救ひ世を助ける基礎となるのでありますから、神様の出現は此の地塲を現はす爲めであるとも云ふ事が出來るのであります。

右の様な譯でありますから、地塲は本教の最も大切なる塲所でありまして、其意義を研究する事は、最も必要なことであります。それで以下地塲の意義を説明するのでありますが、是れを明らかにするのには、創世説を全部語らなければならぬのであります。然しそれは容易でありませんから、地塲の因縁と、地塲と教徒、地塲の將來と云ふ點から申し上げたいと思ひます。尙ほ是れを他の言葉で申し上げますと、教祖出現以前、即ち過

去の地塲は如何でつたか、又た教徒と地塲とは現在如何なる關係があるか、最後に地塲は將來如何なるかと云ふ事をお話したいと思ひのであります。

地塲の因縁

地塲は教祖の神懸りに依つて、始めて人間の世界に現れて來たのでありますが、其の以前は誰一人として知る者が無かつたのであります。それは恰も立派な寶玉が地中深く埋れて知る者が無かつたのを、發見者が掘り出して其の寶玉が分つた様に、人間の心から隱されていた地塲が、教祖に依て現はされたのであります。故に地塲の意義は教祖の言を信じて、自ら悟るより

外はないのであります。

此の事を他の例を以て申しますると、互ひに人間は自分の年と兩親と生地は誰れしも知つている所であります。然し其の年や兩親や生地を、如何にして知つているのであるかと云へば、それは親から教へられたから知つているのであります。是れを云ひ換れば親の言葉を信ずるから、自分の年も兩親も生地も、分つているのであります。若し親の言葉を信ぜず、疑ふていたならば何も分らぬ事になるのであります。何故なら生れながらにして、自分の年を數へる譯にも行なければ、兩親を知る事も出來ないし、生地を覺へている事も出來ないからであります。

それと同じでありまして地塲の意義も、神様の言葉である教

祖の言を信じて行なければならぬので、何故かと疑問を狹むのは、最早親の言葉を信じていないのと同じで、何も分らぬ事になるのであります。故に自分には多少理解の出來ぬ點があつても、それは自分の心の成人が出來ていないからであると思ふて、唯それを信じて行より外はないのであります。何故なら神様は人間を創造せられた、實の親であらせられるからであります。』

然らば神様は此の人間の創造を、如何に說かれたのであるかと云ふに、此の世界は始め泥海であつて、何んの區分もない靄の如きものであつた。その中に月日兩神が居られたのであるが、月日兩神居た計りでは、何んの樂しみもないと云ふので人間を造ることを談合せられたのであります。其所で泥海中を見澄ま

されて、人間を造る道具となるものを見定め、それを道具に使ふて人間を始められたのであります。

所が人間の苗代卽ち母親となられる伊邪那美命が、其の道具となることを拒まれたのであります。それで月日兩神から生んだ子の數だけの年限がたつたら、元の屋敷に伴れ歸つて、神として拜をさすと仰せられたのであります。それで伊邪那美命も得心されて、此の地塲に於いて人間を宿し込み、十月十日留まつた上、日本全國へ七十五日かゝつて生みおろされたのであります。其の子數が九億九萬九千九百九十九人であつたから、九億九萬九千九百九十九年の年限のたつのを待兼ねて、伊邪那美命の靈を持るる教祖を、元の屋敷へ伴れ歸られたのであります

故に御教祖は艱難苦勞の道を通られたから、又眞の心が強かつたから、神になられたのではなく、既に人間を創造せられる時から、神様になられる事が定まつていたのでありまして、御教祖の出現と共に地塲が現れて來る事も、既に其の時から定まつていたのであります。それにも拘らず御教祖が苦勞の道をお通り下されたのは、眞の親であるからで、子は其の苦勞に依つて眞の親たる事が覺れるのであります。

斯樣に地塲は遠い創世の時から、深い理のある、所で人間の生下された所でありますから、人間の故郷とも申ますれば、又元の神が居られる處でありますから、人間の親里とも申すので、本教の信者が地塲に參拜するのを、歸ると云ふのは全く此理に

依るのであります。

以上は地塲に關する因縁の、極く大略を説たのでありますが前にも申す通り、是を詳しく説明するのは、全く容易なことではありません。然し此の因縁を大略でも知つて置かないと、本教の起つて來る理由も分らなければ、地塲と教徒との關係も充分に會得出來ない點が生じますので、右の様に荒筋だけを申し述べたので、詳しい事は皆様の御研究を願ふ事に致します。

地塲と教徒

お地塲は人間創造の地であるから、人間の生れ故郷である事は前に申した通りでありますが、それなら現在生きている人間

と、お地塲とは直接に如何なる關係があるか、是れをこれから申そうと思ふのであります。それには先づ本教立教の意義から明らかにして行かなければなりません。

立教の意義は前にも申しました通り、地塲の理を現はして世界を助ける爲めではありますが、それには世の立替をせなければなりません。世の立替をするのには、世界の人心を洗ひかへて、行かなければなりませんので、それを神様は『人間は立て流しの館で内造りがしてないから、今度神が内造りをするのや』と仰せになつております。是れは人間の心が未だ不完全であるから、それを完全にする爲めに、神様が此の教を立てられたのであります。故に之を云ひ換へますれば、眞の人を造る爲で

あるとも云へるのであります。

然らば如何にして神様は眞人を造られるのであるかと申しますと、是れは人間を元始めた時と、同じ仕方同じ方法でせられるのであります。それ故凡ての人が元の地場に於て生みおろされた如く、眞人となるのにも亦地場に於て生みおろさねばならぬのであります。

然らば如何にして地場で生おろされるかと申しますと、御承知の通り本教を信仰して、其の信仰が進んで來ますと、別席を運ぶのであります。別席とは本部に於て熱心なる信者を、特に仕込むのでありまして、毎月一回宛九ケ月運ぶ事になつております。是れは道の遠近に依つて、二ケ月に一度、三ケ月に一度

と云ふ様に區別がありますが、兎に角九ケ月かゝらねばならぬことになつております。

そこで此の仕込まれると云ふのは、如何なる事をするのであるかと云ふに、本部員から教理を聞かして貰つて、自分の心を洗ふて貰ふのであります。一度運んで一度、二度運んで二度と云ふ様に自分の心が、運ぶ毎に掃除をして貰へるのであります。左様して最後には如何なるかと申しますと、九度運び終つたら授訓を頂くのであります。是れをお授けと云ふのでありまして。此の御授を頂いた者が、地場に於て更生されたのでありまして卽ち眞人として地場で誕生したのであります。此の人等を教徒と云ふのであります。

従つて教徒は地場の子でありまして、本教の爲に教徒が各地で働くと云ふのは、全く此地場の爲めに働くのでなければ、何んの價値もないのであります。然るに現在では此授訓の意義を輕くして、九回さへ地場へ運んで貰ふてさへ來れば、それで好よい事の様に思ふて居る者がありますが、是れは大變な間違ひであります。何故なら唯貰ふばかりでなく、自分自らが更生した人間にならねばならぬので、授訓はされても自分が更生されていなかつたら、何んの爲めに授訓を頂いたのやら分らぬ事になるのであります。

以上の如き譯でありますから、本教の信者から云ば、地場は單に人間創造の地であるばかりでなく、人間更生の地になるの

であります。それのみならず此の地場に、神様は天理王命の名を授け置くと仰せられたのでありますから、信者が朝夕祈る所の天理王命は、卽ち此のお地場を目當としている事になるのでありますから、道の爲めに働くと云ふ事は、地場卽ち親里の爲めに働くのと同じであります。

故に如何なる土地にあつても、其働く理が眞の理、卽ち地場の理に通ふものでなければ、此の道の働きと云ふ事は出來ないのであります、又理を積むと云ふても、理は元一つにより無いのでありますから、凡ての理は地場にあるので、此の地場より受くる理を積むより外はないのであります。故に地場に於て授訓を頂くと共に、地場の爲めに働いて、地場の理を受けて行か

なければ、十分の成人を見ることは出來ないのであります。又地場の爲めに働いてこそ、段々心が勇んで結構な理が現れるのであります。

地場の將來

最後に地場の將來は如何なるか、そして我々人間とは如何なる關係があるかと云ふ事を說くのでありますが、御教祖の豫言に依りますると、地場は將來八町四方に擴大されるのであります。そして其の中心に甘露臺が建設せられるのであります。

此の甘露臺と云ふのは、人間を始めた證據として立てられるのでありまして、石造りの高さ一丈二尺の臺であります。御教

祖在世中、二段まで積れたのでありますが、警官が沒收したりしましたので、神の思惑が變つたのであります。それは最始甘露臺を建てゝ、其の甘露臺に依て、世界を一列に澄そうと云ふお考へであつたが、後には世界を澄してから、甘露臺を建てられることになつたのであります。

然らば其の甘露臺とは、如何なる意味のものであるかと申しますと、甘露臺の上に平鉢をのせ、天より下る甘露を受けるのであります。老子は天地和して甘露下ると申して居りますが、天地が眞に和合したら甘露は下るもので、其の甘露を教祖は人間の壽命藥と仰せられたのであります。

本教で百十五歲が人間の定命であると申しますが、本教を信

仰したら、それで百十五歳の定命があると思ふのはそれは早合點をしたのであります。此甘露臺に下る甘露を頂いた者は、それが壽命藥となつて、百十五歳の定命が頂けると說かれたのであります、と云つて是れは誰れでも頂く譯には行かないのであります。其の心が眞でなかつたなら、如何に其の甘露を頂きたいと思ふても、心に曇りや埃のある間は頂く事が出來ないのであります。それで最始に此の甘露臺を建てゝ世界を澄そうとせられたのであります。

其の甘露臺が將來地場に建てられるので、吾々は幾度か生れ變つた後、其の甘露を受けねばならぬのでありますから、地場と人間とは單に大古の昔、深い關係があつた計りでなく、現在

に於ても更生の故鄕でありまするし、將來は人間の定命を授けられる所でありますから、人間と地場とは離れる事の出來ぬ、強い深い親子の緣が結ばれてゐるのであります。斯う考へて來ますと、地場は他の敎派に於ける參場所などゝ、其意義が非常に違ふものである事も、如何に尊ばねばならぬかも分るのであります。

旬時と地場

以上で地場の意義を大體お話したと思ひますから、最後に旬時と地場に付いて一言申し上げて置きます。既でに申しました通り、地場は本敎に於いて實に重大なる意義があるのでありま

すから、此の地場を尊重して地場の爲めに働かねばならぬのは云ふ迄もありません。然し同じ様に働くと申しましても、時旬を間違へて働いては、折角の働きが無駄になりますから、時旬を間違へぬ様に働いて行かなければなりません。

本教で刻限の理と云ふのが、非常に重い理とせられてゐるのは全く此理由に依るのでありまして、御本席御在世中は此刻限の諭しに依つて、本教の方針が定まつたのであります。然し現在では此の刻限の指圖はありませんから、天啓に依つて時旬を知る事は出來ません。然し地場は親里であり、神様の御住居になつてゐる所でありますから、地場で現れる事は、即各教會の採るべき道を指しておられるのも同じでありますから、よく地

場の理を見分け聞分けて、働いてこそ旬時の理に從へるのであります。

然らば現在地場に於いて、如何なる事が始つているかと云へば既でに御承知の如く、御教祖四十年祭の準備が始まつているのであります。四十年祭は大正十五年一月でありますが、本部は此の四十年祭を、最も盛大に行ひたいと云ふので、今から其の準備に忙殺されているのであります。何れ四十年祭の事は、本部から詳しく説明せられる事と思ひますが、兎に角親里では此の四十年祭を中心に、凡ての事が行はれているのであります

此の點から考へますると、今は四十年祭の爲めに働くべき時旬なのであります。時旬を逸したならば、折角した事が其の價

値を失ふのでありますから、時旬の理をよく悟つて、本部も部下も一手一つになつて、大いに活動さして頂かねばならぬのであります。

何れ四十年祭には皆様も、必らずお地場へ歸られる事と思ひまするが、其の時親の家へ歸り悪い事など無い様に、今日から心一ぱい働いて、四十年祭には喜び勇んでお歸り下さる事を御願して置きます。

逝ける者來る者

逝ける者來る者

一

逝ける者來る者と云ふ題だけでは、何を意味してあるのか分り悪いと思ひますから、是の題に就いて先へ一言申して置きます。私しが茲で逝ける者と云ふのは、死んで行つた人々を指して居るのでありまして、其の次ぎの來る者と云ふのは、未だ此の世へ生れて來ていない者、即ち將來生れて來るべき人々を、來る者と名づけたのであります。

其所で私しの語りたいと思ふのは、其の逝ける者と來る者と現在此の世に生きて活動してゐる我々と、如何なる關係がある

かと云ふ事と、若し關係があるならば、それに對して我々は如何なる事をしたならばよいかと云ふ事を申し上げて、私しの話しを終へたいと思ふのであります。

それで話の順序として先づ逝ける者から申します。逝ける者は既でに此の世から其の姿を無くした者、即ち現在から云へば過去に生きて居た人々であります。其の人々が死と云ふ現象に出合つたが爲に、生存を終つたのであります。其の人々と我々現在に生てゐる者との關係を明らかにするのには、先づ其の死とは如何なる事であるか、と云ふ事から申さねばなりません。

死とは如何なる事か、是を醫學上から説明致しましたら隨分六ケ敷い問題でありませうが、普通の常識の上から申しました

ら、血の循環がやんで脈が止まり、呼吸が無くなつて体溫が降下し、意識が消滅した狀態を云ふのであります。斯うなつたら最早や人間としての生存を全うする事が出來ないから、火に燃すか土に埋めるかして、其の肉体を始末するのであります。

然し玆で考へなければならぬ事は、人間と云ふものは單に肉体のみのものではなく、半面には心と云ふものがあるのであります、死は成程心の働きである意識は無くするけれども、心そのものまで消滅せしむるものであろか否やと云へば、今日の學問でも未だ確答が出來ないのであります。それで或る者は死は身心共に滅するのであろと説き、又或る者は死後の生と云ふ事を主張してゐるのであります。然し其の何れが正しいのである

か、今の處誰れも判斷を下す事が出來ないのであります。

そこで我々は此の問題を教理の上から、考察して見必要があらうと思ひます。然らば教祖は如何説明せられたかと云に、教祖は人間の肉体を神よりの借物とし、其の死は丁度古い着物を脱で、新しい着物と着替へる様なものであると説れたのであります。是の説明から、考へましたら人間の肉体は死と共に亡ぶのでありますが、其の靈魂は亡びずに、又新しい肉体を持て生れて來ると云ふ事になるのであります。然らば死んで生れる迄の間は如何なつて居るのであるかと云へば、是れはお筆先の中に『神がだきしめていた』と云ふ事がありますから、其の間はやはり神様に抱かれて居るのであります。即ち靈として生きて

居ると云ふ事になるのであります。

斯く死者が靈として生きて居るならば、必らず靈の働きが現れて來なければならぬ筈であります。是の事に關しては幽靈の存在不存在が、心靈學上の大問題になつて居のでありますが、實驗の出來ないものであるだけ、科學的には迷信とせられて居るのであります。然し心靈學會の報告などに依つて考へますると、殆んど疑ふ餘地の無い程に、種々なる例證が列擧せられているのであります。

然し私しは幽靈の有無を語りたいと思のでありませんから、是れ以上話す事は必要はないのでありますが、兎に角御教祖の説明されてある如く、靈魂が不滅のものであるならば、我々現

在の生存者と、如何なる關係があるか、それをこれから述べたいと思ふのであります。

二

死者と生者の關係を説明するに付いて、私しは主として實際上の事から申したいと思ふのであります。死者が死後の靈的生活を持續しているか如何かは問はぬとして、我々が死者を想起する時、其の死者の生前に持つて居つた、人格や思想や趣味などから、種々なる影響を受けるものであります。それが近親の場合殊に兩親や妻子の場合には、一層深刻なる影響を受けるものであります。

社會には父母の死の爲めに、其の性格が一變してしまつた者や、妻子の死の爲に、病氣に罹る人が澤山あるのであります。是等は、要するに皆な死者に影響せられて居るので、斯した著しい變化がなくとも、生者の心中に死者の心が宿つて來事が、時々見受られるのであります。學者の云ふ所に依ると、甚だしいのになると、幾代かの先祖の性格が、或一人の者に代る〳〵現れて來ると云ふことであります。然しそれ等は異數の現象であつて、普通は死者が生者の心を、知らぬ間に支配している樣であります。

例へば或る事件に關して、死者が生前斯う話していたからと云ふ事が、其の事件を解決する鍵となる樣な事が往々ある。此

の場合其の事件に關係した者は、無意識の間に死者に支配されて居るのであります。斯様に無意識の間に、死者が生者を動かしてゐる場合が、此の世には隨分澤山あるのでありまして、時に依ると死者が生者の一生涯を支配する場合があります。それを學者は遺傳だと云ひますが、然し何等血統上の關係のない者とも、同じ關係が生じるのでありますから、遺傳と見てしもふ事は出來なからうと思ひます。

以上は普通の生活上に現れる事に付いて申したのでありますが、是れが宗教上の事になると、更らに此の關係が密接になるのであります。何故かと云ば教祖たり開祖たる人は、多くは死者であつて、其信徒たり教師たる者は、凡て生者でありますか

ら、信徒や教師が教祖や開祖を理想とし、其の教理に依つて生活し、救濟の要求をなす以上、其の間に深い關係があるのであります。若し其の關係を絶無とするならば、殆んど宗教は成立せない事になるのであります。

嘗て西洋に英雄崇拜を非常に高唱した人がありましたが、此の人の考へでは英雄を崇拜する事に依つて、其の人格的の教化を得ようと云ふのでありまして、是なども死者と生者との關係に、深き交渉がある事を認めていたからであります。本教に於いて教祖を理想とし、其五十年の道すがらを雛形とするのは、是れ亦此の關係の存在する事を認めているからであります。

此の點から考へますると、我々の父母や近親者に高潔な人格

者を持つて居る事は、その事が既でに大なる幸ひであります。反對に、盜人や惡人の子弟が次第に惡化して、社會の下層に落ちて行くのは、又た此の關係に依る所が多いのであります。故に人心を敎化する任にある者は、此の死者と生者の關係を、深く理解して置く必要があらうと思ふのであります。

三

次には生者が死者に及ぼす影響に付いて語らねばならぬのでありますが、死者は既に肉体を持て居ないのでありますから、明確に其の變化を知る事は出來惡いのであります。然し死者が生者に及ぼす影響が、生者の心持に依つて變化を現はす所を見

ると、生者が死者に及ぼす影響の存在する事が推知し得られるのであります。

例へば非常に惡い行爲をして、其の父を苦しめていた親不孝者があるとする、父は死ぬ迄其の子の事を思ひ續けて死んだので、子は父の死後深く心に苦しみを感ずるやうになつた結果、心を入れ替へて今度は善い行爲をするやうになつた。それで心の苦しみから脫れる事が出來たと同時に、親の靈に對しても深い親しみを感ずるやうになつた、斯う云ふ例は社會には隨分澤山あるやうであります。

斯云ふ場合に學問では、それは良心に攻められて苦しみ、又良心に滿足を與へたので、心が安心出來たのであると說明され

て居るのであります。説明としては是でも十分でありますが、死者としての父の苦痛が、心のみでなく肉体上に現れて來る場合があります。其時良心の滿足のみで、其苦痛から救はれるかと云へば、左様は行かぬのであります。やはり死者の靈が要求するだけの事をせなければ、肉体の苦痛即ち病氣は全治せぬのであります。故に是れ等の實際の事から考へましたら、死者に對して生者の影響のある事を認める事が出來るのであります。

又斯う言ふ事に依つても、それを知る事が出來るのであります、一体死者と云ふものは、意識の存在してゐるものか如何かは分りませんが、生者が自分即ち死者の事を思ひ出して貰ひたいと努力するやうであります。例へば年祭とか年忌とか云ふ様

な場合にそれを怠つたとか、捨て置いたとかした時には、よく夢に現れて來るものであります。此等の點から見ましても、死者に對して生者の行ふ事が、何等かの影響を及ぼす事があると云ふ事が云はれるのであります。

四

次には來る者でありますが、來る者とは現在は未だ此の世に生れて來ていないが、將來生れて來る者を指してゐるのであります。其の生て來る者と現在此の世に生存してゐる者とは、何かの關係があらうか無からうか、ありとすれば如何した關係があるか、それをこれから申したいと思ふのです。

云ふ迄もなく將來此の世に生れて來る者は、現在生きてゐる者から產て來るのでありますから、現在の者が過去の人々の影響を受けてゐる樣に、將來に生れて來る者が、現在の人々の影響を受けるのは、明らかなる事實であります。瓜の蔓に茄子はならぬと申しますが、是れは植物に於いて眞理であるのみならず、人生に於いても同じく眞理であります。其所で問題は如何云ふ樣に影響するかと云ふ事でありますが、是れは中々深い研究を要することで、僅かの間に凡てを申すことは困難でありますから、其の大体だけを申すことに致します。

前に靈魂は不滅であると申しましたが、靈魂が不滅だとすれば、肉体の衣服を神樣から借て、再生して來のは當然の道であ

ります。然し靈魂が再生する場合に、何の約束もなく偶然に、此の世へ再生することは想像されないのであります。其所には必らず何等かの條件が無ければならぬので、それを本教では因縁と云ふのであります、即ち因縁のある所へ靈魂が再生して來るので、因縁の無い處へは生れる事が出來ないとせられてゐるのであります。

從つて一家に於て、親子となり夫婦となり兄弟となるのは、何れも深い因縁の然らしむる所で、人間の力を以つてしては、如何とも出來ない宿命的なものとせられているのであります。故に夫婦の間に生れる子供は、必らず生て來なければならぬ、必然的な因縁を持つてゐるのであります。所が夫婦の心が隔離

してゐるとか、夫又は妻の心が埃に充され、其の結果肉體の疾病を持つてゐるが爲めに、子を生む事の出來ない者があります斯う云ふ夫婦の間に再生せなければならぬ靈魂は、生れる道を拒絶せられているので、再生の機會が無くなる譯であります。斯う云ふ點から考へますと、現在の人の夫婦關係が、將來生れて來る者に對して、非常な影響を持つてゐるのが分るのであります。

五

右は子女の出産に關して申したのでありますが、次には來る者の性質と、現在生きてゐる者との關係でありますが、新たに

生れて來る者が、其の兩親又は先祖の遺傳を受ると云ふ事は、今日では學者も承認してゐる所であります。若し之れが事實だとすれば、現在生てゐる者の日常生活や、其の精神が其の子孫に、多大の影響を持つてゐる事は云ふ迄もありません。是れを社會の實際の上で調べましても、不良少年や少女は、家庭の圓滿を缺いでゐる家から、大部分出來てゐるのに依つても、之れは疑ふ餘地はないのであります。

更らに本教の教理の上から、此の點を考へてみますると、十五才迄の子供に、疾病が現れると云のは、其の兩親の心使ひが間違つているから、現れて來るとせられてゐるのであります。何故なら十五才迄は、人間としての自覺もなければ、善惡を判

定する能力もなく、唯兩親の意志に從つているのでありますから、心身を煩はす何ものも無いのであります。子供の病氣は子供自らよりも、病氣で苦しむ其の苦吟を見いなければならぬ、親の苦しみは、更らに幾倍であるかも知れない。苦しむ者は懺悔をせなければならぬので、卽ち子供の病氣は兩親の心使の現れであります。

若し此の道理から押して考へまする、子女が幼少の間に死ぬと云ふ事は、一面因緣であると云ふ事も云へますが、一面兩親の心使の結果だと、斷定することも出來るのであります。從つて子女を失つた兩親は、其の當然の報ひとして、生涯其の失つた子女を思ひ出しては、其の心を苦しませて行かなければな

らぬ、重荷を背負はされてしもうのであります。

以上は十五才迄の子供と、生者との關係でありまするが、更らに生者の行爲が、其の子女の一生を左右することがあるのであります。例へば親が盜人であるとか、不倫の行ひをした結果は、子女を、社會的に葬つて、其の一生を無駄にせしむる事もあれば、肉体に惡影響を殘して、一生苦痛に泣かしめる事もある。親の因果が子に報ひと云ふ事がありますが、是れは全くの事實であります。

更らに之れを進んで申しましたら、直接の子女ばかりでなく後世生れ來る幾多の子孫に惡影響を傳へるのであります。嘗て米國に一人の不倫の者がありました。其の子孫が二三百人も出で

來ましたが、其の内で眞人間になつたのは、僅かに十數名で、其の他の者は凡て不倫の徒となつていると云ふ事實があるのであります。故に現在生きている者と、將來此の世へ生れて來る者とは、時間的には遠い隔たりがある樣ですが、其の影響から云へば實に恐ろしい程接近してゐるのであります。

六

以上申しましたのは、過去の人卽ち逝ける者と、未來の人卽ち來る者と、現在の人卽ち生ける者とが、深い關係があると云ふ事を、明らかにしたのでありますが、次ぎに起つて來る問題は、生者である我々は、此の逝ける者、來る者に對して如何に

すれば良いのであるかと云ふ事であります。卽ち逝ける者の靈を慰め、來る者の幸福を增進せしむるには、如何なる心使ひと行爲を必要とするかを考へねばならぬのであります。

死者に對して其の生前を思ひ起し、年祭又は年忌を行ふて其の靈を慰めると云ふのも、一つの方法であるに相違ありません。然しそれだけでは死者を慰め得られるだけで、非常な消極的なものであります。のみならず死者が生前、妻子の不倫な行爲に苦しめられて、死を招いた樣な場合に於ては、年祭や讀經ぐらいでは、到底其の靈を慰める事が出來ないのであります。何故なら妻子の不倫に對する不安が、死者の靈をして安心せしめないからであります。然らば如何したらば好いのであるか、私し

は是れを一言で、眞實の人になるより道はないと斷言したいのであります。佛教の教に、一人出家をすれば、九族天に浮ぶと云ふ事がありますが、是れは全く其の通りであります。一人の眞實の人が此の世に出現すれば、其の時代の人が救はれるのみならず、其の前代の人も救はれるのであります。

是れを本教の教祖の一家に付いて考へましても、中山家に眞實の人たる御教祖が現れ給ふた爲めに、中山家の方々が現在の幸福を得られたのみならず、其の親族の方々も、同じく幸福を受けていられるのであります。是れ等の人々は教祖生前には、既でに歸幽せられた方もありましたが、教祖の眞實の靈化に浴して、再生せられる時には現在の幸福を、其の身に受て來られ

たのであります。

之れに依つて見ましても、一人の眞實は現在の人々を救ふ力があるばかりでなく、遠き死者をして仕合せに導くものでありますから、生前兩親に對して孝養の道を盡せなんだものは、死せる親に孝行を全ふせなければならぬので、それは自分が眞實の人となるより外はないのであります。

七

逝ける者に對して、眞實の人となる事が、大なる慰めであり救ひであるが如く、來る者に對しても、眞實の人となる事が、最も子孫を思ふ道であります。

本教に一人の非常に熱心な、教祖の高弟がありましたが、其の人の長男は又た其の反對に、始末に悪るい不道徳な人でありました、此の人に依つて本教の輕重を論ぜられる程でもありませなんだが、それでも本教に對して甚だしい汚點を與へた事は確かです、或る時は此の人を教外に放逐することが、本教の爲めであると極論せられた場合もありました。

けれども其の人の親は、實に尊い信仰と低い眞實の心を持たれた方で、何人も其の追從が出來なかつたのであります。從つて本教は其の方に依つて、どれだけ發展し力付けられたかも知れないのであります。其の當時の本教の信仰は、全く其の方に依つて、支持せられていたと云ても過言ではなかつたのです。」

此所に父子に依つて、本教は大なる矛盾に陷つたのであります、其の處置に苦しんだ人は、決して少なくなかつたのであります。然し結局其の子を放任して置くより外に、適當な方法はなかつた。何故なら其の子を處置するには、父たる人の功績が多大であつたのみならず、本教の教義は之を處置すると云よりも、之を善導する事が本義でありとせられたからであります。

父たる人の死後に於いても、其の人に對する本教の方針は變らなかつたが、幸ひ現在では其の人も眞面目になり、父だけの信仰と眞實は無いとしても、其の精神は受け繼いで、本教の爲めに働いて居られます。

是れは事實の一例でありますが、今日其の人が眞面目になり

得たのは、全く父の信仰に依るもので、之れを逆に云へば、父の眞實が死後子の墮落を救ふたと云ことになるのであります、其の他今日學者の間で研究せられてゐる。遺傳の法則から考へましても、現在生きてゐる人の生き方如何に依つて、後世の子孫が如何に甚大な影響を受けるかは、明らかに論證せられるのであります。故に現在生きてゐる者は、後世に生れて來る者の爲めに眞實の人となる必要があるのであります。

八

更らに一歩を退いて、現在に生きてゐる者と生きてゐる者との關係から考へましても、人間は眞實の人となる必要があるのであります。何故かと申しますると、現在生きてゐる人々は、殆んど安心をしてゐる者がなく、苦しみ嘆いてゐる者が多いのみならず、此の眞實心のない爲めに、悲慘なる悲劇を作つてゐる者が、到る處にあるからであります。

社會の混亂が經濟關係から、變化して現れると云ふ事も確かに一部の事實であります。然し人間の心が虛僞や、飽くなき慾望の爲めに、苦しめられてゐることも事實であります。何方かと云へば家庭に於ける悲慘なる出來事や、生命に關する疾病などは、重もに精神的の原因にあるのであります。事實一家の經濟は豐で、何不足の無い生活をしながら、不倫な行ひをしたり僞瀆を弄したり、無望な慾望に馳れて、家庭を破壞し一身を捨

てる者が、却つて食なくして餓死する者より、多いのに依つても分ることであります。

斯うした不眞實な心を持つて、互ひに好くない接觸を重ねていつたならば、其の結果は社會や家庭に、大きい害毒を流すのみならず、延いては自分自身をも亡ぼさなければならぬ、悲境に陷つて行くのであります。客觀的にみれば善良な人でも、其の心に眞實心がなく、不足や不滿に充されてゐる爲めに、其の身を失ふものが澤山あるのであります。故に社會の爲めや一家の爲めと云ふ事から離れて、自分を保護する上からも、生きてゐる者は其の心を眞實化して行くことが、何よりも大切なことであります。

九

近年になつて個人とか快樂とかを尊ぶ思想が、西洋から輸入せられて、現在の人々は多いか少ないか其の思想に、影響せられてゐるのであります。是れも單んに人間が現世限りのものである、死後の再生などを非定してゐる者には、甚だ都合の好い考へでありますから、人生を深く考へない人々が、喜んで迎へるのは尤もな次第であります。

然し其の個人と云ふのは、觀念化された個人であつて、事實は決して他と關係なしに、存在することは如何しても出來ないのであります。從つて自分の快樂や慾望のみを滿足せしむる爲め

に、勝手な事をする事は、許されてゐない筈であります。無論人間には自由意志があるのでありますから、強いてやれば如何なることも出來ますが、それはやがて自己を苦しめるのみならず、死者をして其の苦しみを増さしめ、子孫をして其の不幸をして大ならしめ、生ける者を嘆かすより外には、何んの得る所もないのであります。

是れに反して人間が眞實の心になり、人間としての正しい道を踏んで、德を積むことを心懸けて暮せば、如何なるかと云ば嘘の世の中慾の世の中を、眞實の心となつて通るのであります から、其の始めの間は通り惡い道を通らねばならぬのは當然であります。本教を信じて道に入りながら、中途にして信仰を止

めるのは全く此の苦しい道を通りぬけるだけの、眞實心が無かつたからであります。然し何時迄も左様した苦しい道ばかり通らねばならぬと云のではありません。胸に目醒めた眞實心が、やがて表に現れて來る迄の苦しみであつて、云ひ換れば其の心が變るや否やの、神の試驗を受て及第する迄の間であります。

其の細道を通りぬけたら、大道に出られるのでありまして、眞實の德は其の頃から、其の光を放つて來るのであります。萬人が求め探してゐる、安心した境地と云ふのは、此の道を通つた人に始めて與へられるのであります。斯くして自分が救はれるのみならず、延いては其の一族をも助けられるに至るのであります から、人間は自己の爲めばかりでなく、遠き過去の人々

の爲めに、又未來に來る者の爲めに、そして現在の我れ人共に救はれる爲めに、眞實心を振ひ起こして、人間としての正しい道を通らねばならぬのであります。

本教で人間は眞實であらねばならん、正しい道を通らねばならぬと云ふのは、右述べた様な譯からでありますが、之れは教義が左様であると云ふばかりでなく、世の實際が其の通りであります。私しの申し述た所を更らに深くお考へ下さつて、若し眞實の心にお成り下さつたら、必らず其の方は人生を深い意義あるものと觀ぜられると共に、愉快なる一生を送られる事と信じます。

大正十一年九月二日印刷
大正十一年九月五日發行

著作者　奈良縣山邊郡丹波市町三島　増野皷雪

發行所　道友社編輯部

代表者　大阪市南區安堂寺橋通一丁目　板倉槌三郎

印刷者　大阪市南區安堂寺橋通一　濱田正夫

印刷所　濱田印刷所

Pl
2

終